ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成二十八年六月一日発行（第百十九巻第六号）

# ホトトギス

六月号

# 俳句随想〔四百八〕

汀子

毎月、追われるように仕事をしている中でふっと、自分の歳を思うことがある。それも全然、自分の歳のことを忘れていたことに愕然とする。しかし仕事が健康のためによいならば有難く恪勤にしていかなければならないであろう。今、「ＮＨＫ俳句」の連載が終ったと思っていたら、後一年俳句会の事を書くようにと依頼があり、お引き受けしてしまった。どうぞこのようなことを書いて欲しいという大事なことがあれば、私にまでお報せ頂きたい。俳句随想で書かせて頂くことは、俳句について少しでもお役に立てばよいので、取り上げることが余り卑近なことにならないようにと思うのであるが、「天地有情」の選をしていると、つい、こんなことでいいのかと思ってしまう間違いを見つけて忸怩たる思いになってしまう。

今回はすでに選句が終ってホトトギス社に送り、やれやれと思っている時に校正の担当からファックスで送られてくる質問である。

私は女学校三年の時に終戦を迎え、それまでの三年間は学校工場として、飛行機の部品を作る工場に変身し、その合間に勉強をしたという時代で育った。私は文法が弱い。ホトトギスの仕事をするようになって随分勉強させて頂いたが、これは何段活用だから「……けて」とは言えません……と言われる。例えば、「猛る……」を「……猛けて」とは言えない。成程と納得してサインをする。今、改めて文法の勉強をしているのである。歳のことなど言っていられる雰囲気ではない。

PDF= 俳誌の salon

# 句日記

汀子

平成二十七年六月一日　ロイヤル俳壇

淡路島より玉葱の苞提げて
花みかんその香の所在隠れなし
蛞蝓の銀の軌跡の消ゆる場所
梅雨近き晴の一日と思ひつつ

六月六日　芦屋ホトトギス会

父が好きなりし枇杷とて送らるる
明易し仕事の切れ間なかりけり
存在となる色未央柳かな
烏の子松の高さにありしこと

六月七日　野分会

でで虫や告冬さんはもうゐない
早苗植ゑ地球大事と思ひけり
でで虫を見かけぬことに気づかねば
でで虫を見かけ平和と思ひけり

六月七日　下萌句会

鈴蘭の野にはじまりし北の旅
何事もあるがままなり梅雨の晴
風薫る芦屋は山と海の街

六月九日　大阪倶楽部

雨止んで吹き下ろす風薫りけり
五月雨や予報通りに午後は晴
好き嫌ひ問はることも夏至近し
五月雨の午後は止むてふこと信じ
考への行きつ戻りつ風薫る
どの色を四葩の色と親しまむ

六月九日　綿業倶楽部

青芒靡く姿の見えそめし
葉の色に紛れたるより雨蛙
雨止めば所在の失せし雨蛙
葉の色になりきつてゐる青蛙
気づきゐて気づかぬ様に雨蛙

六月十一日　清交社

水のなき如く動かぬ目高かな
遠き色そこに河骨咲いてをり
午後は梅雨戻る出仕度ありにけり
梅雨の傘どこかに入れてある安堵
計画は着々梅雨も明くる頃

六月十二日　工業倶楽部

栗の花その香うとみてなつかしく
雨蛙所在のありてなき如く
梅雨に添ふ旅路のありて自ら
雨止んで梅雨を忘れてゐる時間
栗の花疎開せし日の遠きこと
露涼し仕事を済ませたる家路
離陸して夏至近き日と思ひけり

六月十五日　アサヒカルチャー句会

梅雨入りせしよりの晴とは有難く
露涼し仕事を済ませたる家路
離陸して夏至近き日と思ひけり

六月十六日　有恒俳句会

短夜の旅はやばやと予定組む
茂りたる庭と気づきし旅帰り
夏至近し暮れゆく家路ありしこと
動かねば蜘蛛の所在のなかりけり
一文を閲し終へたる明易し

六月十六日　無名会

入梅やこの頃仰ぐ空のなく
一文を草し終へたるアマリリス
アマリリス今日は二つの会に出る
書斎には大きすぎたるアマリリス
今日もまた電話ですますアマリリス
入梅といへる覚悟のやうなもの

六月十七日　夏潮句会

水音は雨音ならず涼しさよ
咲くもののどつと増えつつ梅雨の庭
今の間に庭に出てみる権雨晴間
配られし銘菓涼しき灯の下に
咲き初めて合歓の旅路の近づきぬ
茂る庭いつも風音あるところ

六月二十日　北近畿ホトトギス俳句大会前日句会

絹といふ汗の説明聞く集ひ
何色の薔薇が好きかと問ふ園に
梅雨荒るる予報の旅路恙なく
術後の眼いたはる眼鏡露涼し

六月二十一日北近畿ホトトギス俳句大会

雷も知らぬ熟寝となりしこと
この広き大地涼しさ誘ふ雨

六月二十五日　きさらぎ会

梅雨の栁抜け来しやうな旅心
育つまで所在明かさぬ烏の子
梅雨入りせしよりの旅路の晴つづく
権雨入りとてまだ降りさうで降らぬ日々

六月二十五日　アネモネ句会

夏至といふ折返す日の大地あり
夏至の日の二十四時間ありにけり
夏至暮れてゆく暮れてゆく家居して
紫陽花は雨が似合ひて雨に咲く
向日葵の花束を抱き来られしを
邂逅の話はづみぬ涼しき灯

六月二十六日　時雨句会

蝸牛育てて耳鼻科医師かな
夏草の刈られてありぬ滑走路
なつかしきでんでんむしに偲ぶ人
花籠を飾りて梅雨を明るうす
冷房に頼りたくなく頼りたく

六月二十八日　句会と議演の会

朝から晴れしは梅雨の中休み
梅雨晴のつづく予報を信じけり

六月二十八日　祝句有馬さん

重ね来し日々に涼しき人集ひ

PDF= 俳誌の salon

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年六月五日　六甲会　入院の為不在投句

虚子館の茂に会へる日とは何時

記念樹の茂に心飛んでをり

病窓の最上階の茂かな

芦屋行叶はず茂るばかりなり

退院の期待初蛍の期待

病窓を過る都心の蛍かな

六月八日　朝日カルチャー若草句会

病室に色生まれたるゼラニューム

病窓に草取の景嵌めこみて

蝸牛十センチてふ大移動

ででむしとなりて見惚れる写真展

ゼラニューム視力戻りし目に眩し

六月十日　カトリック新聞選者吟

矢車の夜を奏でてゐる音色

六月十一日　土筆会

夏衣吉田小幸の悌を

猫の手も借りて障子をはづしけり

襖はづして六甲の風強し

六月十二日　北國文芸選者吟

四時間の手術病窓明易し

六月十四日　日本伝統俳句協会通常総会

梅雨晴間視野拡がつてゆきにけり

六月十八日　登高会

その端に猫ぽつねんと鰺を干す

鰺香る病院食の朝餉かな

鰺売や路地に集まる割烹着

蔓揺れて西瓜の花の目立たざる

伸び切つて西瓜の花は空を恋ふ

さびき釣鰺次々と飛び出せり

六月二十、二十一日　北近畿ホトトギス俳句大会

紅薔薇の視力戻らぬ目に優し

サングラス同士佳人と野獣かな

もうワイン誰も勧めぬ五月闇

丹波路の河鹿に山気解けゆく

六月二十一日　ホテルロイヤルヒル福知山投句

蟻地獄人類の罪背負ふかに

六月二十三日　若水句会

万緑を統べて明智の城小さし

偲ぶこと多き浜名湖鰻舟

酒禁じられたる漢鰻食ぶ

十薬の咲くにまかせて主留守

あの頑固頭十薬煎じたく

丹波路の山並丸く万緑裡

六月二十四日　目黒学園句会

優曇華に五歳の指の好奇心

優曇華や山荘朽ちてゆくばかり

読み耽るマタイ六章明易し

泥鰌鍋牛蒡ばかりが減りもして

明易や燭の絶えざるマリア像

退院の日から出社や夏の朝

明易し二言目には酒飲むな

六月二十七日　野分会東京例会

苗運ぶ新幹線の高架下

ででむしのプロック塀といふ馳走

ほんたうは貝になりたき蝸牛

六月二十八日　ホトトギス社句会

青鷺の脚上がるより暮れゆけり

PDF= 俳誌の salon

# 雑詠

## 廣太郎　選

同じ径辿らせてゐる雪女　米子　中村嚢介
まとひたる星明り脱ぎ雪女郎　同　同
新雪を踏めば宿せる空の色　同　同
英語みな片仮名にして街時雨　渋川　木暮陶句郎
冬銀河天文台のジュラルミン　同　同
プラチナも金もダイヤもクリスマス　同　同
神ひとつ灯火ひとつかまくらに　東京　田丸千種
かまくらに小さき膝を折り曲げて　同　同
かまくらとかまくらほどの無人駅　同　同
雪晴のゆきわたりたる京の町　長岡　安原　葉
空路ゆく旅冬帝に見守られ　同　同
旅果てて戻りしわが家日脚伸ぶ　同　同
春動く宇宙の不思議重力波　神戸　山西商平
急がねぱ瀬音に春を聞きながら　同　同
芹摘に出でたゞ瀬音聴いてゐる　同　同
弓始心の邪鬼と対峙せり　奈良　古賀しぐれ
寒紅やをみなは神代より強し　同　同
寒紅も嘘も真赤でありにけり　同　同

日記果つ果てるといふは懐しむ　神戸　後藤立夫
くすぐつたさうに笑ひて福笑　同　同
待春といふは期待の広ごりて　東京　橋本くに彦
透明といふ色のある寒の水　同　同
オリオンを横切る雲の春隣　龍ケ崎　今橋眞理子
つくばひの水の硬さも二月かな　同　同
水仙に沖の明るくありにけり　同　同
人も来ず電話も鳴らず寒雀　福山　竹下陶子
春隣都心の土の濡れ色に　同　同
浮びたる俳句千転懐手　東京　大久保白村
面脱げば湯気たつ頭寒稽古　同　同
寒紅やみめよき故の不幸せ　熊本　岩岡中正
書初や我が本名の書きにくし　同　同
初電車富士山駅で待ち合はす　神戸　山田佳乃
初場所や富士を四股名に六力士　同　同
浜焚火してゐて遠流めきにけり　香川　湯川　雅
島ばかり海ばかり見て年惜む　同　同
島時雨して人生の端にゐる　同　同
初鶏や五重塔の影絵めく　同　同
振袖の蝶の舞ひたる弓始　同　同
数の子を食んで少子化てふ時代　同　同
寒月やときに刃となる言葉　同　同
嘘ついてきし寒紅を引き直す　同　同
寒紅やもう決意などせぬ齢　同　同

PDF= 俳誌の salon

# 雑詠句評（五月号より）

眞理子・中　正・むつみ
肖　子・葉　　・憲　明
とほ歩・美　奇・保　佳
静　龍・廣太郎

悪い事ではないが、最近の「クリスマス」は、宗教的な意味というよりお祭意識の方が強くなり、都会ではネオンが輝き、イルミネーションも其処此処に見られる。それとは反対に、この句に詠まれて島は、素朴にキリストの誕生を祝っているのだろう。本来のクリスマスの信仰心が見て取れる。（廣太郎）

**虚子と話しゐる吾の夢の覚め聖夜**　熱海　**嶋田一歩**

ふと日常も夢の中にも恩師虚子がいるような、親しさと尊崇の一句である。まるで父恋にも似た思いの深さである。しかも虚子を夢に見たのが、たまたま聖夜。虚子への思いは、神への思慕や信仰にも似たものとして表現される。

虚子随順の素直な句であると同時に、「虚子と話しゐる」夢ということから、じわとあたたかさが滲んでくるような一句。「聖夜」によって、一段と感動深い句になった。（中正）

直接虚子に師事された人ならではの至福の一時である。実際の体験が記憶として夢に現れたのだろう。又、虚子の生前に話したくても話せなかった事も、夢の中では話せたのかも知れない。そしてその夢が覚め現実に戻っても「聖夜」という至福の時間であった。ゴージャスな体験である。（廣太郎）

**ネオンなき島のしづかなグリスマス**　直方　**林　加寸美**

「ネオンなき」から、暗い夜空に星座が美しく見えてくるようである。「しづかな」と平仮名で、ゆっくり詠み下ろして、静けさの中のクリスマスの情感が語られている。クリスマスとは、本来そういった闇に包まれた静けさの中でこそ迎えられるものであろう。島の素朴なクリスマスの喜びが、しみじみと伝わってくる。（眞理子）

PDF= 俳誌の salon

竹の春塗り替へられし風の色　東京　稲畑廣太郎
父逝きて三十五年白露又　同　同
厳寒の快晴や真つ白の富士　長岡　安原　葉
富士在す闇や春待つ湖畔の灯　同　同
牡丹焚く火のみちのくの闇の底　相模原　木村享史
情あり牡丹焚く火のもつるるは　同　同
過ぎし今日すでに昔や小正月　東京　今井千鶴子
すめらぎの七種摘まれたる昔　同　同
踊りつつ明くる郡上の朝ばらけ　神戸　後藤比奈夫
郡上なれ三日踊りてまだ飽きず　同　同
美しき初夢を見る願ひあり　熊本　岩岡中正
マスク外して饒舌となりにけり　同　同
雪晴の富士見る帰路となりにけり　東京　河野美奇
初富士や暁闇幕を開け初めし　同　同
お戯れの言葉涼しく頂きぬ　福山　竹下陶子
俳諧の過客の如く梅雨に入る　同　同
大和屋に戻つて来たる戎籠　神戸　後藤立夫
繭玉の揺れたがる色がらぬ色　同　同

大学の塔の輝く初景色　吹田　大橋　晄
妻の魂降り来か庭の寒あやめ　同　同
風花の夢見るごとく舞ひ出でし　群馬　中杉隆世
春浅きからまつ林見て戻る　同　同
縁談を頼みがてらの礼者かな　神戸　三村純也
初不動水商売を卑しまず　同　同
休みたきところに手摺庭四温　宝塚　水田むつみ
ふと触れて雨後の手摺の冴返る　同　同
雪晴といふ混乱もありにけり　龍ヶ崎　今橋眞理子
緋毛氈新しくして古雛　同　同
針納奥の隙へと手を伸ばす　香川　湯川　雅
繭玉に無駄な間隔なかりけり　同　同
ひたすらに輝き宵の寒の月　東京　山田閏子
父のごとき兄との別れ冬の梅　同　同
海岸はすぐそこ椎の花盛り　同　今井肖子
風抜けて緑蔭匂ひ立ちにけり　同　同
宮司とも巫女とも鬘を替へにけり　神戸　和田華凛
人の世の鶯くるくると替へてをり　同　同

PDF= 俳誌の salon

# 去年今年

稲畑汀子

お正月の準備は年々簡単になつて行くのは仕方がなかった。姑が元気な時はお次を従えてお蔵から次々出してくるお重や器の数数が配膳室に揃えられると、あとはお料理にかかる。夫の出番である、玉子焼き。錦卵。試食で減ってしまい出来上がってお重に詰めるのは半分有るか無いか。

「試食ばっかりして、駄目よ！」

私の一声は聞こえない。

姑も夫も自分の分担を心得ていた。ローストビーフが焼き上がるのを温度計で確かめる。私は南京街で買ってきて三日前から水に戻しておいた乾燥「ふかのひれ」を、大鍋に作った鶏のがらのスープに筍の細切りと共に入れて最後の仕上げにかかる。試食は夫の出番である。皆、若かった。

まるで徹夜のような時間の経緯も平気であった。

夫も姑も亡くなった。いまはホテルプラザの料理長だった鷲池さんが毎年届けてくれるのを有難く使っている。あとは変らぬ簡単なお料理にお雑煮の用意をする。

昨年秋に転んで怪我した私の傷も何とか治り、歯の治療は気長に通うしか仕方がないので、一応元気に新年を迎えられた。

「唯今！」

年末三十日の夕刻、関西の友達と呑んで来たと言って次男の深二郎が帰って来た。三十一日は廣太郎夫妻が帰ってきたが、その子供たちはばらばらに帰ってくるそうだ。去年、間違えて大阪から宝塚行きの電車に乗ってしまったため、引き返して遅くなったが、今年も同じ轍を踏んだらしい。

「馬鹿だねえ」

判りきっているのはこの辺に住んでいる我々であるからで、めったに関西に来ることのない孫の順太はそうして少しずつ覚えていくのであろう。

「明けましておめでとうございます。今年もよろしく」

一月五日、頼まれた原稿がまだ書けないままＮＨＫ出版の方々へ初電話を掛けた。

「『朝が来た』の五代さんは大阪の商工会議所の初代会頭と言ってるけれど、私の主人の祖父の稲畑勝太郎がそうだったのではないかしら。あれは本名でストーリーが成り立っているけど、フィクションも入っているのかしら？」

「そうだったのですか。よく分かりませんが、調べてみましょう」

私はよく姑から、姑の父のフランスへの留学、活動写真や持ち帰ったカーキ色の染料、香料、大阪商工会議所のこと、姑がフランスの女学校へ妹と留学させられたことなどを何度も聞かされていた。姑は私が嫁いで一緒に住むようになって、まるで友達のような優しさで話をしてくれた。姑と嫁という関係ではなかった。

「廣太郎！　あの五代さまって、稲畑勝太郎のこと?大阪商工会議所の初代会頭って聞いていたけど」

「え？　初代と違うんじゃない。ちょっと調べてみるわ」

スマホを出して来て調べてくれた。

「違う違う、十代が稲畑勝太郎やで！」

「あら、私、ＮＨＫ出版の古澤さんに調べてほしいと言っちゃった」

「ほんまに、馬鹿やなあ」

「銅像があるって聞いてたし……」

「銅像は初代会頭の五代さんのもあるんよ。グランパパさんは十代目ですよ……」

今年も先が思いやられると思いながらも目出度く始まった。

PDF= 俳誌の salon